

## 【こぼと保育園】

(スタッフふりかえり)

### スタッフ①:

ありがとうございました。今日はたくさん五感をつかって遊んでくれました。どちらかと言うと、大人の方に伝わればという感じでしたから、自然豊かな場所でなくても、普通の保育の中でも遊んでくれるかなというところです。

そこで、それをやっていくための皆さんの手立てと、子どもたちの反応というところを聞かせてもらえると嬉しいです。

### スタッフ②:

みんな葉っぱの穴については最初、もうすごかったんです。「これはバーベキューかなあ？」とか、「これは魚釣りかなあ？」と声掛けをすると、「これは魚だよ」などと言いながら、また違う葉っぱを探していました。そうしたら、そこに先生も入ってくださって、「じゃあ、これは？」とか言いながら、いろいろな葉っぱを探せたお陰で、次に繋がりやすかったと思います。まず、多種多様の葉っぱがあることに気づき、穴を通すという遊びのところだけでいろいろな方向にいけたのが良かったです。

それで、中々何かを見つけられず、ふらふらしてしまっていた子がいたんですけれども、その子が一枚だけ葉っぱを持っていたんですね。そこで、「これも手みたいだね」と声を掛け、また違う形の手に似た葉っぱを見つけたときには「恐竜かなあ？」などといういろいろ言っているうちに、「森の中へ何か探しに行こう！」と言ったら入って来てくれたんですよ。もうそこからは、「ガオー！」などと言い始めたので、「おなか为空いたのかなあ？」「何か食べ物を探しに行こうか？」と、少々物語のストーリー仕立てにして誘いました。すると、落ち葉の中の赤い葉っぱを何かに見立て、モグモグなどと言うものですから、「これはサラダみたいな葉っぱだね」と話が膨らみました。

そうこうしているうちに、綺麗な草を切ったときの「プチン！」という音が大層気に入ったらしく、別の葉っぱもプチン・プチンと切るまた別の遊びを始めました。先生が「音がするんだねえ。今のもいいねえ」とおっしゃっていたんですけれども、それからはいよいよ前の方までいろいろなものを探しに行くようになった気がします。

私は後ろだったのですが、そんなふうになんかふらふらしながら来る子がいたんですよね。なので、どうしようかなと思っていたんですけれども、よく動く男の子たちに坂のところで、「ここ、ちょっと登ってみる？」と言うと、少し登ってはズルズル滑るというのをやっていた。あと、下からしゅうっと生えている草に戦いを挑み、枝で思い切り葉っぱをばあっとやったりと、何となくぶらぶらしてしまっている子への声掛けは少し難しかったです。動きたい子はそうやって少しずつ興味を持ってくれたかなという感じでした。

だから色塗りも、「あっ、ここにあるね」と言って、先に行くのを食い止めるために出したような形だったんですけれども、それなりに食いついてくれましたし、あとは、もうとにかくあれもこれもちぎって匂いを嗅いだりして、それが気に入った子もいました。そのような感じで、自分にヒットするものがあると集中して、ひたすら切ったり、黄色い花だけを集めたりというふうになったというところです。

### スタッフ③:

最初は階段を上がって行く手前のところで「落ち葉がザクザク」などとやっていたんですけれども、まだみんな、体を動かしたい、走りたいという方に気持ちが傾いていたんですね。そこで、一枚の葉っぱを見つけたときに少し足を止めて、「これ、どちらが大きいかな？」と比べ始めたところ、「僕の方が大きい」と言って、大きい葉っぱをどんどん持って

来るようになりまして。そうして、「これこれ…」と競争のようにみんなが一生懸命集め出したとき、みるみる視点が下の方に行くのを感じましたね。「じゃあ、これより大きいのを見つけられるかなあ」、「今度は、これより小さいのはどれかな？」という感じになって、もうみんな「これは？」「これは？」と、入れ違いのように次々と来るようになったんです。

それからは段々登って行ったんですけども、やはり葉っぱに目が行くんですね。最初に葉っぱには穴が開いていると勉強した時点でみんな、それが結構気になっていたようなので、「これも穴があるよ」と言って見せました。特に、アミアミの葉っぱを一枚見つけたときには、「この葉っぱの影がこんなに綺麗だね」と話しました。

そうしたら、ある子が穴の開いた赤い葉っぱを持って来たんです。だから、「光に当たると色が変わるね」という話をすると、自分で色をただ単に見るというのではなく、持ち上げて太陽にかざして見るというそれまでとは違う見方をしてくれるようになったんですね。すると、そこに男の先生が来られて、「こうやって見ると赤だけれども、こうなると色が違うね」と、実に興味津々で見てくださっていました。

あと、赤い実が落ちていまして、ある男の子が「これ、イチゴかなあ？」と言うんですよ。なので、「匂いを嗅いでみる？」と言ったところ、すぐに匂いを嗅いで、この匂いはイチゴではないと言いました。だから、「これはイチゴではないのかなあ？」と確認すると、少し考えて、「見た目は赤いけれど、匂いはイチゴではない」と言うんですね。すると、僕も匂いを嗅ぎたいという感じで、そこにもまた子どもたちが集まって来て、すぐにみんな匂いを嗅いだんですけども、やはりイチゴの匂いがしないと言う訳です。このときは、そういうふうに関心した人の声を聞いて近寄り、自分でも確認をするという一面が見えたなあと思いました。

それと、私もうわあっと行ってしまったときには色塗りをしました。私が最初に黄色のセンダン草で塗ると、子どもたちも同じ黄色の花を取って来たんですけども、ある男の子は、もう花が咲き終わってしまったチクチクしているものを持って来たんです。当然、色は付きません。そこで、「何で色が付かないんだろうね？」と尋ねたところ、自分で考え、次から黄色の花だけを摘むようになりました。

今度は同じように色塗りをしていた女の子の一人が、枯れた葉っぱを塗り始めたんです。やはり色は付きません。ところが、その子はもうすぐに「ぼーい！」と捨ててしまい、どこかへ行ってしまったから、何故それをやろうとして、何故すぐに捨てたのかを聞きたかったのですが、聞くことが出来ませんでした。

ただ、よく見ていると、これをやってみて駄目だったら違うものという感じで、子どもたちのあるあるも見られましたし、そうやっていろいろな葉っぱで挑戦する子もいて、すごく良かったなあと思います。

それから、ある男の子が先ほど言ったように、上に笹があって、その葉っぱをばあっと取っていたんです。だから、「何だかボクシングみたいだね」と言うと、ボクシングがどんなものかまで分かったのかどうかは分かりませんが、また、「うわー…！」とやり始めて、そこでまた新しい遊びが出来た訳です。

こちらが軽く一声掛けると、すぐに乗ってくれる子どもたちでした。だから、また遊びが広がるというのが見られました。

#### スタッフ①:

ありがとうございます。結構いろいろ遊びましたね。

先頭の方はやはり先に行ってしまう感じでしたが、そこで最初のところと同じように、始めに「ほら、大きい葉っぱだね」という話をしたので、階段を登る前に「あっ、大きいの見つけたあ！」というふうになりました。ただ、たぶん一生懸命やっている子はスタッフ③のところに行くという感じで、やはり前の子はもうズンズン行ってしまうんですね。

でも、何かを踏んで横の方に入っていくと、「何か匂いがする」と言って、隅っこのごちゃごちゃした段などを楽しんでいる感じもありましたし、主任の男の先生も「あらっ、何だろ

うね？」と、一緒に考えてくださっていました。だから、階段を登ってうわあと来たでしよう？実は、登ってそのまま下りるつもりだったんですよ。ところが、こちらも行けると言い始めたものだから、そうだよねえと思ったんですよ。

スタッフ③:見つけてしまったんですね。

スタッフ①:

そう。だから、子どもたちが遊びたい、行きたいという感じだったので、その体を動かしたいという気持ちも何とかしたいと考え、こちらならまた戻って来られるからいいかなと思いました。そうしたら、結局みんな付いて来たんですよ。

スタッフ②:一緒です。「何が出るかな？」と言いながらも…。

スタッフ①:

予想外に器用に体を動かせる子たちだったので、いささか想定外ではありましたが、それも面白かったかなと思っています。

スタッフ③:そんなに転ばなかったですよ。

スタッフ①:全然転びませんでした。

スタッフ③:階段も上手に登っていましたよ。

スタッフ②:すごく上手に歩いていました。

スタッフ①:

しっかりしている子たちだったので、そういう探検も面白かったかなと思います。本当は最初にこれをやりたいと思ったのですが、割と興味がいろいろだったので、ちょっと無理かなと考えて入ってしまったんですよ。でも、やはりその辺りも少しやっておいた方が良かったかもしれないという気はしました。

スタッフ③:そうですね。

スタッフ①:

遊びについては割と同じような感じで、最初にやった穴や色の印象が強く、そこから先に持っていくところまではいきませんでした。ただ、葉っぱの穴を使って魚釣りのようにして「釣れたあ！」という遊びなど、ちょっとしたきっかけがあればもう少し進化するようなところは見られましたし、それはそれで、まず第一歩としては良かったのかなと思います。こういう葉っぱを恐竜の足のようだと言っていた子もいましたし、一生懸命集中して穴に小枝を通そうとするあの姿はすごくいいなあと感じました。「どれを通そうかな？」とか、「穴が開いているのはどれかな？」というふうに、自分でこういう葉っぱを探したいという目で見られたのはやはり、その遊びが充実していたからではないかと思いました。因みに、先に行ってしまう子は先生が見てくださっていましたが、その先生にキノコがあったことを教えた子どもがいたようなんですよ。ところが、先生の方は触っても良いものなのかどうか分らなかったようなので、「触っても大丈夫ですよ」と言って、先生にも表と裏を触ってもらったんですけども、「触れるんだあ！」という感じでした。そのときに、女の子が「ネバナバしている」と言ったので、先生に「語彙が豊かですね」と伝えたら、「この子は結構いろいろな表現をします」とおっしゃっていたんです。だから、そう

いういつもと違ったものを触ることでまた、表現や言語の方にも繋がるということを感じてもらえたらいいかなあと思いました。

先生にもなるべくいろいろなことを伝えたいなということで、こうして透かして見る見方を教えたり、遊木の森はハゼがすごく綺麗だったでしょう。赤い葉っぱのことを非常に気にされている先生がいらしゃったので、「そんなにむやみやたらと怖がる必要はありませんが、ハゼは少し要注意ですね」という話をしたりもしました。

あと、先生と一緒に「これ、どんぐりかなあ？でも、ちょっと違うよねえ」と言って、他の実と比べてりしながら茶の実を拾っていた子がいたんです。その子がつたない言葉で何かを言って、先生も「えっ、何？」という感じでお話されていたんですけども、私には何と言ったのが全く分からなかったの、その子が立ち去ってから先生に分かったかどうか尋ねたところ、先生も分からなかったとのことでした。そこからお茶の木の話になったのですが、お茶っ葉とお茶の木が全然結び付いていなくて、「えっ、これがお茶っ葉ですか？」という感じでしたね。

スタッフ③:それは先生がということですか？

スタッフ①:そうなんです。これはお茶の木で、そこに実が付いていると、なんだか変な説明をしていると思ったのですが、うまく合致しないようでした。「当たり前ですが、お茶の木も花が咲いて、ここに実が出来て、これが落ちて来るんですね、ふんふん」と、まさに自分の中で納得をさせているような感じでしたが、すごく面白い話だとおっしゃっていました。だから、「刈り込むとこちらのように背が低くなるんですけども、元々はこんな状態なんですよ」という話もしたりして、先生たちとのそうした会話もすごく楽しかったです。

なので、予定のところまでは行けませんでした。すごく集中していて本当にじっくり遊べたと思います。先生たちは色が付くとか、影が面白いといったところにハッとしたような感じで、そういう場面が出て来ると熱心に写真を撮っていらしゃいましたね。ただ、子どもたちはあまりにも一生懸命集中してそれをやりすぎていて、帽子しか撮れないとおっしゃっていました。

スタッフ③:なるほど、カメラの方を向いてくれないんですね。

スタッフ①:

そう、みんな必死でやっているからということで、そんな声も聞きました。この次に普段のところという話になる訳ですが、最後に主任の先生が少し話してくださったように、葉っぱがそんなにないということで、今の時点では遊木の森だからこんなふうのびのびと出来たんだと思われているんだろうなあと感じました。普段から行っているところでもできるということではまだ、難しいのではないかという気がしましたね。

スタッフ②:

でも、植え込みぐらいはあるような感じもするんですよ。だから、そういうところに入ってみようかなと思うようになってくださった方がいいですね。

スタッフ①:

「ここにもあるよね。じゃあ、今日はここでちょっとやってみようか？」というような形でやってくださるといいですね。

最後が少し駆け足になってしまっていて、「よく見て匂いを嗅いだらこうだったね」ということを言い忘れた状態で終わってしまいましたが、そこは先生たちも割と楽しんでいただけたのではないかなと思うんです。だから、それよりも素材ですね。普段の保育の中でどのような素材をいかに見つけられるかということがネックかなあという気がしました。

スタッフ③:

やはり遊木の森は子どもたちも特別感を感じるころではあるので、そこから普段と繋げるという部分が難しいですね。

スタッフ①:

もう一歩という感じではありますよね。

スタッフ②:園庭はどんな感じなのでしょう？

スタッフ①:園庭はありましたか？

スタッフ④:ありました。

スタッフ①:園舎の裏にあるんですか？

スタッフ④:

はい。木が1本か2本はあったかもしれませんが、普通に滑り台や砂場などがある園庭です。あとすぐ近くに中学校があります。

スタッフ②:

学校は何か拾えそうですね。まあもともと、すぐに綺麗になってしまうようなところばかりなのかもしれませんが…。

スタッフ①:

いつもは清水山公園とか駿府城公園に行くということですから、まあ確かにという感じはします。

スタッフ④:公園は綺麗にしてありますからね。

スタッフ②:でも、駿府城公園は何か拾えますよね。

スタッフ①:

でも、こういうところへ来て飛び回ったり、走り回ってどんどん行く様子を見ると、やはり普段からそういう感じなんだなというのは思いました。だから、それがどう変化していくかということで、普段のところでも何かもう一回一緒にやってみたい感じがしますね。

スタッフ③:そうですね。

スタッフ②:すごく遊べていましたから、レベル的にはそういう気がしますね。

スタッフ③:上手でした。

スタッフ①:

だから、先生が、自分たちがないと思っていただけなんだなあということに逆バージョンで気付いてくださるといいですね。

スタッフ②:勝手に遊ぶ気がします。

スタッフ③:女の子で、大胆に寝そべったりしている子もいましたからね。

スタッフ①:それは本当ですか？

スタッフ③:

汚れることに対する抵抗も全くなく、先生たちも、何か付いているからといって、「ああ、汚れちゃったね」とは言わなかったんですね。だから、その点はすごくいいなあと思いました。

スタッフ②:その子はもう一度ぶわあっと、ものすごい勢いで駆けて来ました。

スタッフ③:自らダイブして行っていましたね。

スタッフ②:そういう子が一人いると、周りもいい感じになるんですね。

スタッフ③:

そうですね。朝見たときにスタッフ①が、「ここは滑り台ね」と言っていたところに私も行って、「じゃあ、やってみようか？」と言うと、一人の男の子が「僕がやる！」と言ったんですけれども、「やっぱり出来ない」となってしまったんですね。だから、「何で出来ないの？」と尋ねたのですが、言葉を濁してどこかへ行ってしまいました。そういったときに、先生たちが何故出来ないのかというのを話し合っていけるといいですね。それによって、「じゃあ、やってみよう！」という気持ちになるかもしれません。

他の子でしたが、最後の下りるところが下りられなかったんですよ。そこで、「どうすれば下りられるの？」と尋ねると、手を繋いだら下りられると言うんですね。先生に聞くと、結構慎重派だとおっしゃるんですけれども、結局は全く問題なく、一人ですいすい行ける感じだったんです。

だから、そこで出来る方法を、前向きに先生も一緒に考えようという提案をしてくださったら少しはプラスになるのではないかと思います。この子は遊べないと言うのではなく、この子ならどう遊ぶかというほうに考えるといいですね。その子も、無事に下りられたときにはとても満足そうで、少しは自信につながったのではないかと思います。

スタッフ①:「出来たあ！」という感じですか？

スタッフ③:そうなんですよ。だから、そういうのが見られたらいいなあと思います。

スタッフ①:

どうしても、危ない危ないとなってしまうと先生はおっしゃっていましたよね。確かに、手が足りないとなんかものなのかもしれません。そこで転んで泣いてしまったりすると、掛かりきりになってしまうと思われるのもよく分かるのですが…。

スタッフ②:そうですね。

スタッフ③:

でも、子どもたちは絶妙なバランスで落ちないところまで行っているんですよ。逆に、これ以上行くと落ちるというところには絶対に行きません。だから、分かっているはずですよ。とはいえ、園としてはやはり怪我が心配ですし、先生は、危ない危ないで先に言ってしまっているところもあって、その辺りは難しいところです。ただ、みんながそこに意識を持って

いって、こちらがすぐに動けるところにいればギリギリまではというところにいけたらいいなあと思います。

スタッフ①:許容範囲を広げて行ってほしいですね。

スタッフ③:そういうのはきっと、慣らしていくしかないんでしょうね。

スタッフ①:

次は1ヶ月後ぐらいのタイミングなので、年末年始も挟みますし、もしかしたらクリスマス会などがあったりするかもしれません。しかも、冬にも掛かるということで、あまりお外に行かなくなってしまうということもあり得ますよね。

スタッフ④:確かにそうですね。

スタッフ②:お正月が入りますし…。

スタッフ③:冬休みと…。

スタッフ①:

この間の打ち合わせのときには、あとに繋がりたいということで、「少し意識して自然の中へ行ってみたいかな」といった言葉は少し聞かれましたが…。

スタッフ①:今日は、いい感じで良かったです。ありがとうございました。

スタッフ③④:ありがとうございました。